



共生の時代

'10
4月

●発行:グリーンコープ共同体的理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876



助産師・母乳育児コンサルタント

もり ともこ
森 伴子さん

「若い頃の私は頭でっかちでした。子育てでつまづかなかつたら、ずっと厳しいままだったかもしれない。32歳で初めて子どもを授かった。そんなわが子の乳児湿疹が「半端じゃなかった」という。「原因は母乳?食物アレルギー?」。病院には行かず、自分自身の知識と努力で乗り越えようと食事制限をはじめ。「なかなか治らないので、食べるものをほとんど除去していきました。根菜も食べない。稗と葉野菜だけの2ヵ月間。家族向くのが楽しみだという。い

と外食もできない。すごく苦しかったし、周りにも迷惑をかけたなあと思う。湿疹の原因は食物アレルギーでなく皮膚汚れただった。1日1回の沐浴では足りない子だったんですね。それが分かるまで、はきつい思いをしました。同じ思いを他の人にさせたくないと、痛切に思ったという。この経験が今の森さんに生かされている。

10年を過ぎる頃には技術も伴い、ある程度の乳腺炎はマッサージでなんとかしてあげられるようになったと柔らかく微笑む。「ただ脂っこいものを食べ続けていたら乳腺炎は絶対治らない。そんな時は薬と思って我慢させますよ」と厳しさも忘れない。

1998年から宮崎県内の助産師による子育て・女性健康支援センター「宮崎か母ちやつくらぶ」に関わっている。性教育・思春期教育の出し前講座で県内の小中学校に出向くのが楽しみだという。い

女性のライフサイクルに寄り添いながら

プロフィール

1958年宮崎市生まれ。都城病院附属看護学校を経て国立小倉病院附属看護学校助産師科を卒業。久留米市、宮崎市の産婦人科医院での勤務後、桶谷式乳房治療手技管理法を認定・受領、1987年母乳育児コンサルタントを開業。(社)日本助産師会宮崎県支部副支部長。家族は夫、長男(19歳)、長女(16歳)。グリーンコープ生協みやざき組合員

2010年度 自生GMナタネ汚染調査活動実施中



Contents

ホームレス問題を考える 13	
人と人がたすけあい・支えあう地域の再生をめざして	2
うちの生産者・うちのメーカー ㊟	
下郷農協	3
～今も続く。私たちが紡ぎ出す牛乳開発物語～	
40万人の利用結集によって、 産直びん牛乳の価格を「1本12円」値下げが実現!!	4・5
～グリーンコープのこだわり再発見!～	
グリーンコープの地域福祉	6
グリーンコープ青果生産者の会「2009年度技術交流会」	
頑張っている産直生産者と組合員が出会うことが大切!	7

私が生協に入ってからこれ10年。とつとりがグリーンコープに加入して7年になる。

わが家の小4・小3・小1の子もたは、ミルクを飲んでからグリーンコープと共につけてきた。ある日、子どもが、飲んでいた牛乳を「まずい!」と言ったことがある。実はその日の牛乳、足りなくて店で買ったもの。いつの間にか子どもたちは本物の味が分かるようになってきたんだなあとしみじみ思った。

送 信

以来、山口の実家に帰るたび、びん牛乳を持参するようになった。牛乳だけでなくグリーンコープの安心・安全でおいしい商品を食べさせてくれて母にもグリーンコープを勧めた。母は「孫のためなら」と加入してくれ、現在に至っている。子どもたちが大きくなるにつれ里帰りもままならなくなってきたのは、帰る楽しみがまた一つ増えたと思うこの頃です。

相野 香

人と人がたすけあい・支えあう地域の再生をめざして

世界的な大不況で、仕事を失い路上生活をせざるを得ない人たちが急増しています。このような状況を何とかしたいと考え、取り組んでいるのが「抱樸館」です。グリーンコープの運動の根幹にあるのは「生命に寄り添うこと」。そのために大切なのが私たちが生活している地域。生命を大切にしてきたグリーンコープは、抱樸館を通して豊かな地域づくりをめざしていきます。

ホームレス問題を考える 13

抱樸館福岡とは

今や失業者の数は40万人とも言われています。社会的格差の拡大によって路上生活者や自殺者も過去にないほど増加しており、深刻な社会状況となっています。「路上で生活せざるを得ない人たちをたすけたい。」「抱樸館福岡」は、路上で生活している人たちの文字通り「ハウス」となり、そこに住んでいる人たちと地域の人たちがつながる「ホーム」となるよう、願いを込めて建設がすすめられています。入所期間は原則6カ月。生活保護の申請、就職や住まいの斡旋などを行い、入所者が自立した生活を送れるように支援します。自立後も継続的にサポート

し、「ホーム」として支え続けていくことをめざします。NPO法人北九州ホームレス支援機構の協力を得て、社会福祉法人グリーンコープが運営し、それをグリーンコープは応援していきます。

「抱樸館を支える会」を設立します

生活困窮者の支援事業というのは、一つの組織の力でだけ経営できるものではありません。これまでは行政が税金を投入して行う福祉の一環として実施されてきました。しかし、行政におまかせするのではなく、私たちは「共助」「たすけあい」の力ですすめていきたいと考えます。人が人間らしく生きあつていくため

に、グリーンコープは人間の善意でよって支えられる事業にしたいと考え、高齢者福祉や子育て応援の取り組みと同じように、ホームレス問題も「連帯」と「共助」を支えに取り組むことにしました。

いと考えています。建設直後から発生する減価償却費、日常の運営費など抱樸館の機能を十分に発揮していくための資金は継続的に必要になってきます。従って、組合員からの善意が有効に活用できるように、課税のない非営利徹底型の一般社団法人を立ち上げることに

しました。年会費という形で組合員の有志を募ります。取引先の方や賛同される団体や個人の方にも会員になっていただく方法も提案しています。既に運営している「抱樸館下関」や、今後抱樸館が各地域に広がっていくことを想定し、その取り組みに有効に使うことを考えて、「抱樸館を支える会」としました。

「抱樸館を支える会」は、同じ地域に生きる人間同士がたすけあい、支えあう組織としてグリーンコープのエリアでの展開をめざします。5月に開所する「抱樸館福岡」はその第一歩。年間180～190人が入所し、地域に育まれながら自立をめざします。

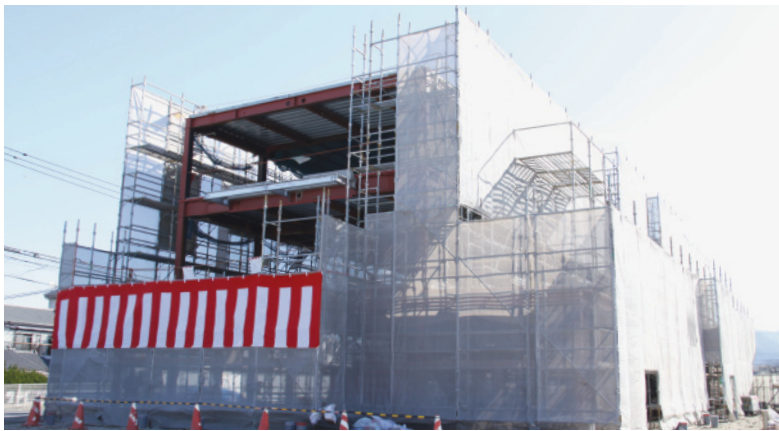
誰もが幸せになれる地域の拠点に

福岡市には、現在1,000人を超すホームレス者がいると言われています。

「抱樸館福岡」の開所はほんの少しの光ではありますが、ここがホームレス問題を解決する起点になればと考えています。抱樸館福岡のあるグリーンコープ生協ふくおかでは、地域の組合員と共に「人と人が生活していく地域」をつくりたい。その試みがはじまります。「生協のおまつりができるね」「小さな子どもを連れたママたちの居場所になれば……」「子どもからお年寄りまで集える場にしたいね」と地元の組合員の夢は膨らみます。地域に暮らす人と人との絆を取り戻す場になりたいと考えています。そして、この取り組みを地域社会を取り戻す運動のうねりへとつなげていきたいのです。たすけあいという名の下に、豊かな人間関係を紡ぎだしていくことは、私たちの未来を切り開いていくことを意味しています。



「抱樸館福岡」の完成予想図



建設がすすむ「抱樸館福岡」の全景（2月6日上棟式）

「抱樸館福岡」の上棟式が行われました！

昨年10月に建設が着工した「抱樸館福岡」は、2010年2月6日に上棟式が執り行われました。式には、グリーンコープ共同体代表理事や各生協の理事長をはじめ、グリーンコープ生協ふくおかの組合員、社会福祉法人グリーンコープやNPO法人北九州ホームレス支援機構の関係者、そして工事関係者など、約100人が参加しました。しんと底冷えのする寒さの中、路上での生活を余儀なくされている人たちへ思いを馳せながら、形になっていく「抱樸館福岡」をそれぞれの目に焼き付けました。

式の冒頭、施主である社会福祉法人グリーンコープの理事長行岡良治さんから、「工事がはじまって4カ月、ここまで無事に辿りつきました。5月の開所まで順調にすすみ、この寒さの中で生活している人たちの生命が守られ、自立していく施設となっていくことを願っています」との挨拶がありました。続いて、グリーンコープ共同体代表理事田中裕子さん、グリーンコープ生協ふくおか理事長田原幸子さん、ふくおかネットワークの代理人山本まりさんの3人からは、これまで頭の中に思い描いてきた「抱樸館福岡」が現実のものになっていく姿を目の当たりにした感動や、組合員としてのそれぞれの立場から積極的に「抱樸館福岡」にかかわっていこうという思いが語られました。

当日は来賓として、地域の町内会長が臨席。「できれば地域の中にこのような施設はない方がいい。しかし、今の厳しい社会状況の中では必要になっていることも理解できる。であれば共に生きる地域の住人として、路上で生活する人たちの自立を応援していきたい」という趣旨の挨拶がありました。

その後、設計事務所から「抱樸館福岡」の建築概要について、詳細な説明がありました。鉄骨耐火構造の3階建ての建物に使用する設備の一つひとつまでに温かさが込められているようすがうかがえました。終盤の餅まきには、グリーンコープらしく産直赤とんぼもち米と紅麹（天然色素）を使った紅白の餅が使われていました。

最後に、社会福祉法人グリーンコープ副理事長奥田知志さんから「手足の感覚がマヒしてしまうほどの寒さの中で上棟式を無事に終わることができました。この寒空の下で息絶えている路上生活者がいます。彼らが味わっている寒さを身をもって体感したのは、大変意味があったのではないのでしょうか。だからこそ、ここは“いのちを守り育てる場所”でありたい。それをめざしたいと思います」との挨拶がありました。

5月から自立支援をすすめていく本格的な取り組みがはじまります。参加者一同、そのことを強く再認識しました。



建設中の内部を見学する参加者

下郷生産者の思いが詰まった産直品



1950年代、入植者によって見事に開墾された鎌城地区の台地



うちの生産者

95

大分県中津市
下郷農協



うちのメーカー

カタログGREENの青果のページに2009年9月から「産直下郷農協野菜セット」が企画されている。限定500セットに対し毎回3〜4倍の注文がある。野菜だけではなく、米、和牛も企画され、カタログGREEN4号からは若鶏がはじまる。

「産直」という流通システムを、半世紀前に日本で初めて生み出し発展させてきた下郷農協を訪ね、参事の松本聡雄さん、生産者の山本利江子さん、田尻嘉郎さん、金丸隆昌さんに話を聞いた。

「農」を楽しみ、誇りをもつ生産者

野菜

下郷の野菜は何十年も無農薬・無化学肥料で栽培されている。「地域有畜複合経営」を実践してきた下郷の大地には家畜の堆肥がたっぷりすき込まれているのだ。

「野菜がおいしいのは、土の力！そして寒暖の差が激しいこと。ここは中津の中心と比べると5度は低い」。有機野菜生産出荷組合代表の山本利江子さんは胸を張る。山本さんは下郷の農家に嫁いで、高収入になるタバコ栽培、しいたけ栽培と、夫と共に働きに働いてきた。タバコ栽培はあまりの労働の過酷さにやめた。今は長男のお嫁さんと一緒に野菜作りに励む。「産直下郷農協野菜セット」がはじまってからは作っても



山本 利江子さん

作っても足りない状況。おいしい下郷の野菜をグリーンコープの組合員に届けたい、その一心で「野菜を育てるのは楽しいよ」と農作業の合間に仲間を募ってまわる日々だ。

組合員が主人公の農協

下郷農協は大分県の北部、中津市耶馬溪町にある。一帯は溪谷美で知られ、平地は少ない。そうした環境で昔から農業は、米や麦・茶・野菜・しいたけの栽培、木炭製造など、自然の生態系を生かして営まれてきた。

下郷農協が設立されたのは1948年。当初から「組合員が主人公」とする運営を徹底して貫いてきた。「産直」は入植者が切り開いた鎌城地区の酪農からはじまった。「下郷のしほりたての牛乳を、地元はもとより商圏となる北九州の人たちにも飲んでもらいたい」。つてを求めて直接出向いて個人やグループに売り歩いたことが新しい流通システムとして評判になった。

た。「産直」の原型だ。後に、そのルートに野菜やその加工品を加えた。農協に集まってくる「出荷基準に満たない曲がったきゅうり」を、もろみ漬にしたものが思わぬヒット商品になったりした。組合員が作るものはどんなに少量でも、見栄えがよくなくても何とか売れるように工夫する。「農家のためになること」を第一に、組合員と農協職員が何度も顔を合わせ、どんなことでも話しあいて解決してきた。そうした活動の結果、「野菜、肉、加工品、下郷のものはどれもおいしくて安全」と評価は高まり、提携する消費者会員の組織やグループは九州、四国全域、西日本、東京まで広がり、安全な食



参事 松本 聡雄さん

料の生産と地域農業振興が行われた。

そのような幸福な状況が一変するのは90年代半ばから。輸入自由化の影響が徐々に日本を襲いはじめ、安い農産物が大量に輸入され市場に溢れた。提携していた生協はすでに巨大化しており、それに対応できない下郷農協は販路を次々と失っていった。そのときの衝撃を松本参事は「下郷が世界に投げ出されたように感じた」という。先輩たちが築き上げたものが意味をなさなくなってきた。なぜそうなるのか当時は分からなかつた。

以降、下郷農協は試行錯誤を続けるが、かつてのようには回復せず、業績は全盛期の3分の1にまで落ち込んだ。小規模の会員グループは産直を支え続けたが、消費スタイルの変化はそれを上回り、新規の会員は思うようには増えなかった。2009年、グリーンコープが下郷農協を訪ねたのは、そのような時期だった。下郷農協の危機は単に「農協の危機ではない」、「産直」の危機だとするグリーンコープの判断があった。グリーンコープ連合専務らとの実務的な取り引きの話に、松本参事は「グリーンコープとは深いところでつながっている。少し話しただけでも十分に通じあうものがある」と、まずそのことに

心から安堵した。現在、下郷農協の正規組合員は500人。会員組織に届ける産直品は、野菜・米・畜肉とその加工品・牛乳とその加工品・茶・乾燥しいたけなど豊富だ。数量に限りがあるが、グリーンコープの抽選システムを利用して企画できるようになった。

また、協同組合立の診療所を1989年に開設。「いづれ農村に医療はなくなる」と、先を見通して建設されたものだ。1998年にはダイケア施設も開設した。地域の中で老いることも次の世代が育つことも安心してできる、そういう環境を創出していった。

黒毛和牛

カタログGREEN45号(2/1〜配達)から下郷の産直黒毛和牛の企画がはじまった。下郷の和牛は子どもを産んだ後の母牛を肉牛として育て

た。今はこの地に根を張り、リーダーの一人として下郷を牽引する。



田尻 嘉郎さん

植地を探すうち下郷に受け入れられた。今はこの地に根を張り、リーダーの一人として下郷を牽引する。

若鶏

下郷の若鶏は、今回グリーンコープとの取り引きを機にグリーンコープ



金丸 隆昌さん

仕様の飼料を取り入れた。最大の特徴は飼育期間。60〜62日齢飼育が通常だが下郷では85日齢前後も飼育する。長く飼えばその分旨味が増す。もちろん開放鶏舎でゆったりと育てている。生産者の金丸さんは、かつてはサラリーマンとして責任ある仕事を任されていたが、身体を壊して辞めざるをえなくなった。下郷に帰って鶏を飼いはじめ、経営的な厳しさはあるものの、豊かな自然と温かな人間関係に気持ちは楽になった。今はグリーンコープに出荷する日を楽しみに待っている。

産直びん牛乳の

値下げが実現!!

ぎ出すびん牛乳開発物語～

2003年11月に新登場以降、多くの組合員から愛飲され続けてきた産直びん牛乳の価格が、カタログGREEN49号(3/1)配達分)から値下げになっています。びん牛乳誕生に至るまでには数10年もの長い歴史があり、「びん牛乳」には組合員の思いが凝縮されています。それはグリーンコープのこだわりそのものでもありません。「経済効率優先の」商品を生産を育む「食べものへ」を合言葉に、びん牛乳の開発がスタートしたのは2002年9月。およそ1年をかけて生み出した産直びん牛乳はグリーンコープの食べもの運動のシンボルとして、多くの組合員に飲み続けられてきました。

今 から約40年前は、成分調整牛乳が当たり前の時代でした。グリーンコープの前身である地域生協の多くの組合員が「ほんものの牛乳」「手を加えていない、搾りたての生乳に近い牛乳を子どもたちに飲ませたい」とのせめてもの思いで「成分無調整の牛乳」を作りました。その当時は、「L(ロングライフ)牛乳」も登場し、それに対する社会的な反対運動なども起こりました。

時代の変化の中で自分たちの牛乳をカタチに

やがて時代は、「大量生産」「大量消費」を見つめ直し、それぞれの「生き方」「暮らし方」を追求する方向へと動き出しました。伴って、食品添加物を排除するなど食べものへのこだわりが強く希求されていきました。

グリーンコープの牛乳への視点は、成分無調整から「殺菌温度」の追求へ。その時の問題意識は、「牛乳は沸騰させてはダメ!」と言われる反面、超高温殺菌法(120～130℃で2秒)で作られていることにありました。「それは、おかしい」という組合員の素朴な疑問をきっかけに「そもそも牛乳って何?」という出発点に立ち返り、ほんとうの牛乳を追求していくことになりました。それが「パステライズ牛乳」への挑戦と

なつたのです。組合員の代表がパステライズ牛乳の本場欧州へ自分たちの牛乳探しの旅に出かけました。「パステライズ殺菌」とは、生乳がもともと持っている成分の本質的価値を損なわない温度と時間で、人間に有害な菌(結核菌など)を殺菌する方法のことです。その殺菌方法を実現させるためには、細菌数の少ない良質の生乳が不可欠です。そこで生産者に「もつと細菌数の少ない生乳にしてください」というお願いをした結果、1985年72℃15秒殺菌のパステライズ牛乳を誕生させることができました。

産地との関係を大切にさらに安心安全を追求

パステライズ牛乳を作るために欠かせない細菌数の少ない生乳。その確保のために酪農生産者に努力をお願いすると同時に、グリーンコープは組合員に呼びかけ、乳牛の乳房をきれいにするために必要なタオルを贈る取り組みをはじめました。産地との関係を深めていこうと、組合員の子どもたちが参加する酪農ホームステイにも取り組みはじ



毎日牛乳を飲んでます

小西光昭さん(エムケーファーム)

わが子は酪農家に生まれながら牛乳アレルギー…。給食の時も牛乳でなくお茶を飲んでいました。友だちと違うことに淋しい顔をしていました。「いつか牛乳が飲めるようになったら、おいしくて安全な牛乳を飲ませてあげたい」。その想いですつと搾ってきました。高校生になった子どもたちは今では毎日牛乳を飲んでます。「家の牛乳っておいしいよね」と言ってくれます。そんな言葉と笑顔が皆さんの家庭でもあふれたら…。今はそう思いながら毎日頑張っています!!

真摯に向きあい自らを反省、企業理念である「食べものは生命の糧」という原点に立ち返り再生を図っている真つ只中でした。そんな姿勢がグリーンコープと響きあい、「生命」を根幹に据え、共に歩んでいくパートナーとなりました。この決断については、2002年9月4日に臨時の総会を開催し、各生協の代表が真剣に討議、組合員の総意として確認しています。

未来に向けて守り育ていきたいー産直びん牛乳

酪農生産者と製造メーカー、グリーンコープの三者の出会いと連帯は、グリーンコープ自前のびん牛乳専用工場建設へとつながりました。設計から備品の一つひとつにまで組合員によるきめ細かい検討を行い、名実共に「私たちの工場」につくり上げました。建設費用16億円のうち4億6千万円を組合員自らが拠出する「みるく出資金」で賄いました。そのために、「なぜ、びん牛乳なのか」「専用の工場まで作る理由」などについて、ていねいに組合員との会話を続けました。1年をかけたびん牛乳開発の取り組みは、グリーンコープの食べもの運動の方向性を改めて明確に位置付けることにもなったと言えます。

びん牛乳専用工場が稼働して6年。工場建設に伴う設備費等の減価償却が済み、NMCとの契約期間も満了となりました。この間、7600万本のびん牛乳がこの工場から生み出され、組合員はそのびん牛乳を飲み続けることで守り支えてきました。同時に組合員への「みるく出資金」の返却も終



通常の酪農業においては、牛の飼料に輸入トウモロコシなどが使われています。その飼料をnon-GMOのものに変更されることになりました。母牛が食べた飼料は2～3週間でお乳の栄養分となるため、乳質に大きく影響することになるからです。

通常酪農業においては、牛の飼料に輸入トウモロコシ

容器を「びん」に! こだわりの最終の帰着点

かつては、市販の牛乳もびん入りが主流でした。それが生産効率や輸送効率などが優先されたことで、市販の多くの牛乳が紙パック入りになりました。同様に、グリーンコープの牛乳も紙パック入りでした。しかし、紙パックは使い捨てられるだけ。このような状況に

紙パックは使い捨てられるだけ。このような状況に

し、全国的な運動として、「集めて再利用する」道が模索され、「牛乳パックの再利用を考える全国連絡会」が発足。その立ち上げに、グリーンコープも発起人として尽力し、その後も共に運動を創り上げていきました。一方、グリーンコープは食べものの安全性と環境保全の観点から、容器は「びん」を、しかもできる限り「リユースびん」を追求してきました。結果、調味料を中心に約8割がリユースびんとなっています。グリーンコープが築き上げてきた「びんリユースシステム」は社会的にも評価されています。

そのような中で、牛乳を「びん入り」にすることはグリーンコープの長年の課題でした。びん容器に比べ、紙パックはどうしても独特の臭いがします。「搾りたての生乳の風味をそのまま味わいたい」。そんな組合員の願いを実現するために、グリーンコープはびん牛乳開発に着手するという判断をしました。酪農生産者との関係が深まる中で、よりよい生乳の追求が可能な状況



グリーンコープのびん牛乳専用工場内にある貯乳タンク

40万人の利用結集によって 価格を“1本12円”

～今も続く。私たちが紡ぎ出す未来～



島根からびん牛乳工場を視察に！



工場長から説明を聞く（島根）からの見学者

産直びん牛乳の登場以来、多くの組合員がグリーンコープ専用のびん牛乳工場を訪れ、製造工程を見学しました。その数は1万人を超え、「私たちのびん牛乳」を実感、名実共にグリーンコープの専用工場として存在していると言えます。

2010年2月28日にはグリーンコープ生協（島根）から職員8人、配送ワーカー4人の計12人が福岡市にあるNMCの敷地内にあるグリーンコープびん牛乳工場を視察。メンバーのほとんどが初めてという見学のようす取材しました。

「職員、ワーカーズは日頃、組合員と出会う現場にいるため、直接組合員の質問などの受け応えをすることが多い。今回のように実際にびん牛乳工場を見学というのは貴重な体験で、今日見聞きたことを組合員にしっかりと伝えたい」と（島根）の青戸専務代行は視察の意気込みを語った。NMCの田中工場長は挨拶の中で、「『新鮮な生乳に余計な負荷をかけない』『できるだけ人の手を触れないラインで』『工程をとおして低温で処理する』の3項目を意識して安心・安全のびん牛乳のためにさまざまな工夫を凝らしています」とグリーンコープのびん牛乳を製造する際の姿勢を説明した。

（島根）の一行はNMCの山本生産課長の案内で、菊池の生産地から届いた生乳がびん牛乳になるまでの工程を見学。清潔に、しかも低温状態で管理された工場

で、低温殺菌された生乳が洗びん機で洗浄されたリユースびんに充填される一連の生産工程の説明を受けた。

びんの返し方を再確認

洗びん後の工程では汚れや傷がないかを機械（カメラ）だけでなく人の目視で厳しく点検されていることを確認した。組合員から質問の多いびんの汚れについて



洗びん工程を熱心に見学

マジックの書き込みやカラー、お茶などによる着色は洗びん機でも落とせない。また、最近ではびんの中にベツトボトルのキャップが入っていたり、びん口に輪ゴムが巻いてあったりするケースが増えているという。（島根）浜田センターの配送ワーカーズふれあいの山崎さんは「今でも組合員から返却されたびんは必ず1

乳の価格の総体的な見直しを行い、ようやく、今回の値下げへと辿りつきました。

「産直びん牛乳」は、これからもグリーンコープの食べもの運動のシンボルとして語り継がれていくこととなります。



となっていたことが要因の一つだったと言えます。

もう一つの要因は、製造メーカー日本ミルクコミュニティ（株）（NMC）との出会いです。NMCはかつての「雪印乳業」。自らが招いた食中毒事件や偽装事件に

本ずつチェックします。でも、今日のお話を聞いて、びんの返し方のポイントとして、キャップをつけること、異物を入れないことなど、組合員さんにもっと伝えていこうと思いました」と今後に向けて意欲を示した。

ノンホモとバスチャライズ

殺菌工程でも活発な質疑応答があり、「ノンホモとバスチャライズはどちらがいいの」というよく組合員から出される質問について意見交換した。「ノンホモ」と「バス」はどちらも殺菌温度が72℃15秒、違うのはバスチャライズ牛乳がホモゲナイズ（脂肪球を細かく砕く加圧処理）加工で脂肪を均質化しており、ノンホモ牛乳はホモゲナイズしていないことだ。ノンホモ牛乳はヨーロッパなどでは一般的だが、日本ではあまり流通していない。「より自然なままの牛乳を」という組合員の希望で生まれた牛乳だ。生産地の新鮮な生乳が確保できること、NMCの技術力、グリーンコープの利用結果という三者の連携があつてこそ成立していることを実感した。グリーンコープ（島根）の視察メンバーは工場では話を聞きながらグリーンコープのびん牛乳の素晴らしさを再認識し、組合員へ語る言葉を獲得した。



グリーンコープの 地域福祉

誰もが安心して暮らせる街づくりをめざして、組合員活動や福祉ワーカーズを中心に「グリーンコープの地域福祉」は充実してきました。現在、高齢者福祉はもとより、子育て応援、2010年5月にはホームレス者の自立支援のための「抱樸館福岡」も完成予定。グリーンコープがめざす地域づくりが少しずつカタチになってきました。

グリーンコープの地域福祉の取り組みを紹介します。

赤ちゃんからお年寄りまで 幸せに暮らせる街に

組合員の夢をことばに

1993年、グリーンコープ連合設立から5年目に、各単協の組合員の代表である理事長が中心になって、実現したいグリーンコープの「思い」を中期計画基本構想「夢ヲかたちに」としてまとめた。実現に向けて、まず全組合員を対象にしたアンケート調査やヨーロッパなどの福祉先進地視察を行い、1994年6月「グリーンコープの福祉政策」を策定。8月には政策に基づき、グリーンコープの地域福祉を主体的にすすめる機関「グリーンコープ福祉連帯基金」を設立させた。

「グリーンコープの福祉政策」と「グリーンコープ福祉連帯基金」
アンケート調査結果から老親の介護の大変さや、孤立しがちな子育てなど組合員の厳しい状況が明らかに

なった。その実態と福祉先進国のノーマライゼーションの取り組みなどを参考に導き出されたのが、10年、20年先を見据えたグリーンコープの福祉政策。
その福祉の基本的観点は、①すべての組合員に利益が享受されること ②ハンデの重い人が最も大切にされること ③地域に開かれたものになること
福祉事業を支える主たる財源は、①グリーンコープ連合納入業者の協力による納入高の0.5%の拠出 ②福祉活動組合員基金（組合員が一人100円/月拠出）とした。

「グリーンコープ福祉連帯基金」はこの政策に基づき、社会的にも急務であった高齢者介護に取り組むために「福祉用品事業」「情報サービス」「家事介護」の3本柱に着手。家事介護の担い手はワーカーズとした。そのためにホームヘルパー養成講座など各種資格取得の支援、ワーカーの技術の向上にも取り組む。生活者の視点で営利を目的としないワーカーズによる高齢者福祉の実践は、社会的にも大きく着目され、きめ細かくあたったケアが高く評価されている。

社会福祉法人の設立や各単協で地域福祉が主体的に取り組めるようになったことを機に、福祉連帯基金は

2004年にその役割を終え解散した。

地域福祉を支える福祉活動組合員基金（100円基金）

福祉の財源として組合員一人ひとりが毎月100円を拠出する参加型地域福祉は、日本では稀有な取り組みと言える。組合員の拠出する100円が、支援を必要とする人のために使われることを組合員の総意として実践するために、各単協は総代会や総会の議決事項として取り扱った。「なぜ、生協が福祉に取り組むのか」「組合員が資金を出すのか」と問いかける組合員に時間をかけて向きあった。各単協では、日本社会における貧弱な高齢者福祉の状況や共助の大切さ、組合員自らが住みたい街づくりに貢献し参加していくことの意義を訴え理解を求めた。今では9単協が取り組み、約3億3800万円が、214件の福祉の取り組みに助成されている。

各単協の福祉活動組合員基金は、組合員を中心とした基金運用委員会で検討・活用されている。

福祉の担い手は、ワーカーズで

「夢ヲかたちに」は、多種多様なワーカーズが地域の再生を担うことを方針に掲げている。ワーカーズは

グリーンコープのワーカーズによる福祉事業は、 66グループ約2,500人が活動しています

(2009年度実績)

在宅福祉サービス 家事全般・産前産後の手伝い・高齢者の介護や介助など	広島・山口・福岡・佐賀・大分・長崎・熊本・鹿児島・宮崎	27グループ。 2,061人のワーカーによる年間の在宅支援は53,006件、661,000時間
食事サービス	福岡・熊本・大分	8グループが活動。 年間266,500食
子育てサポート	福岡・熊本・宮崎	16グループ。 年間の活動は約71,000時間
デイサービス	山口・福岡・熊本・大分・鹿児島	23カ所。 年間延べ利用者は6,233人

ワーカーズによって運営されている福祉事業

福祉複合施設（デイサービス、グループホーム・子育てフリースペース・有料老人ホームなどの複合施設）1カ所（福岡）

小規模多機能型居宅介護事業所 2カ所（福岡・熊本）

グループホーム 1カ所（福岡）

福祉用品店舗 8カ所（山口・福岡・熊本・大分）

*各県の生協ごとに取り組む事業は異なります。まだ取り組んでいない生協もあります。

メンバー一人ひとりが共同で出資し、自主管理、自主運営で主体的な新しい働き方をめざす非営利の事業だ。

グリーンコープの組合員の多くが、地域の中での暮らしの主体である女性。その女性たちが生活者としての感性を生かし、地域福祉などに取り組み、自立していくことをグリーンコープは積極的にすすめてきた。1995年、長く組合員活動を担ってきた組合員を中心に、福岡県に2つの家事サービスワーカーズが立ち上がり、その後次々とワーカーズが誕生した。

社会的な認知と事業基盤の確立のために「社会福祉法人」を設立

2003年3月、将来の地域福祉の展望とワーカーズの社会的自立をめざして、グリーンコープ生協ふくおかと福岡県内のワーカーズが連携して社会福祉法人煙を設立。2008年には社会福祉法人グリーンコープと改称した。設立以後福祉

「険制度」が施行され、それまで行政の措置であった高齢者福祉は、利用者が自分でサービスを選ぶ制度となり抜本的に変わった。高齢者福祉にたずさわっているワーカーズは「介護保険事業」にも参入。安定した経営ができるようになってきた。

2001年に、「グリーンコープ福祉ワーカーズ・コレクティブ連合会」を設立。ワーカーズ相互の交流・強化発展に取り組んでいる。

組合員が思いのたけを綴った「夢ヲかたちに」は、多くの組合員の情熱とグリーンコープ総体の力を得て、着実に形あるものとなってきた。思いと熱意をもって差し出される福祉ワーカーズの手は、必要とする人にやわらかく届けられている。やがて地域そのものが住みたい街に、変わっていくことを夢見ながら。



▲5つの分科会に分かれ、活発な意見交換が行われた

奥田理事長と原田会長▶

頑張っている産直生産者と組合員が出会うことが大切!

グリーンコープ青果生産者の会 2009 年度技術交流会・2010 年 2 月 25 日

グリーンコープの産直生産者で構成している「グリーンコープ青果生産者の会」(以下、青果生産者の会)の、毎年恒例の「技術交流会」が大分県別府市で開催されました。産直生産者約160人が出席。グリーンコープから組合員の代表として、グリーンコープ生協においた理事長奥田富美子さんが参加しました。奥田理事長の報告レポートを紹介します。

別府の大きなホテルの会場受付では、各地から集まった生産者が久しぶりに会う仲間と挨拶を交わし談笑する姿が見受けられました。

技術交流会は、「青果生産者の会」の原田会長の挨拶ではじまりました。その中で「組合員との交流で使用するパワーポイントを各分科会で作ろう」という提案がありました。

続いて、「人・植物・地球の健康に、貢献する万田酵素」と題しての万田株式会社(以下、万田酵素)アグリバイオ技術開発部の大出

光利さんの講演。

今回の講演は、「青果生産者の会」の果菜部会と葉茎菜部会が昨年11月の研修会で広島県の因島にある万田酵素を視察したことがきっかけになったということ

とでした。万田酵素は創設者が「青い草を食べる牛の乳はなぜ白いのか?」という疑問から、酵素の働きに興味を持ったことが始まりです。黒砂糖をベースに果実類、穀類、海藻類など41種類の原材料を使用し、自然発酵から仕上げまで3年3カ月もの月日をかけて

特殊肥料を完成させます。それを薄めて使用することで植物がそもそも持っている生命力を引き出す役割を果たすそうで、苗が丈夫に育ったり、品質の向上、日持ちの向上などが期待できるとのことでした。講演後、

「グリーンコープからは少しでも農薬の使用を減らすように言われている。その際のひとつの方法として考えられないか」という投げかけが青果の会の会員からありました。

全体会の後は5つの分科会に分かれ、それぞれの課題について討議されました。「青年部会」では2010年度のメイン活動として「グリーンコープの配送トラックに乗り、組合員に会って直接アピールすること」を熱く語っていました。その他に、「果菜部会」「葉茎菜部会」「根物部会」「柑橘部会」「落葉部会」「梨・柿など」があり、「出前交流会や技術交流会をしている」「細かい目の防虫ネットを使っている」などの発言があり、減農薬・無農薬栽培に頑張っ

ているようすを感じました。

全体会でグリーンコープから、最近話題になっているネオニコチノイド系農薬について、今後グリーンコープとして調査を開始する旨の説明がありました。この農薬の名前を聞いたことのある生産者はわずかに数人でした。組合員の不安に応える調査ですが、生産者にとつては、生産が続けられなくなる可能性があるかもしれないというようすがうかがえました。

初めて参加した「青果生産者の会」の集会でしたが、グリーンコープにはたくさん生産者がいること(全体で1600人以上)、安心安全なものを選びに作っていることを感じました。そして、ひとりでも多くの組合員が直接生産者に出会うことが大切だと感じました。みかん農家で育った私にとつては「親戚と一緒にいるような安心感」に包まれた一日になりました。



No.21

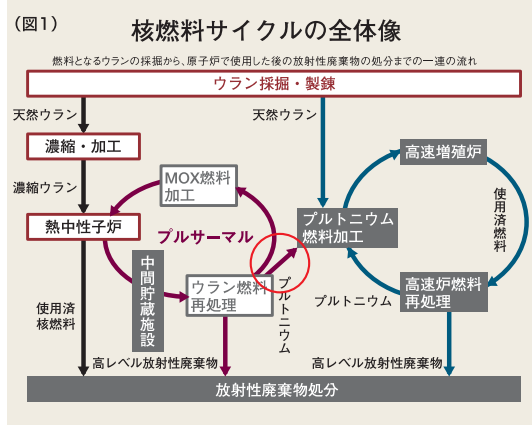
地震大国である日本での原発

日本は地震大国と言われるように、世界の中でも地震の多い国です。その日本の中でも関東から大分、熊本を通って鹿児島県南部へと走る中央構造線は、M(マグニチュード)8を超える巨大地震を起こすおそれのある世界最大級の活断層といわれています。原発が運転を開始してから、大地震に直撃されたことはありませんが、いつ起こるかわかりません。また、原発施設の耐震性も不安です。一般の建築物の基準の3倍の強さの地震に耐えられるように設計されていると言われてますが、1995年に発生したM7.3の兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)では、壊れるはずがないとされてきた高い耐震基準の高速道路や新幹線の高架橋、高層建築などが、もちろん崩れおちました。予想を超える大地震が実際に起こってしまったのです。このように活断層があって地震が起こりやすい日本で、耐震性も不安な原発を、未来の子どもたちに残したくはありません。

出典:「原発を考える50話」西尾漢 著
グリーンコープ共同体組織委員会

《お詫びと訂正》

- ・本紙3月号4面に間違いがありました。訂正してお詫びいたします
- (誤)45万トン→(正)45トン (誤)800万トン→(正)800トン
- ・「核燃料サイクルの全体像」の図○の中の矢印が抜けていました。訂正してお詫びいたします。



言・い・た・い

私の好きな
グリーンコープ商品

「たかがマカロニ」と言わせない

私は「めエルボマカロニ」が大好き。たかがマカロニでしよう!と思われながらも、他のマカロニと全然味が違うのです。マカロニでこれだけ味の違うを感じるのですから、よほどグリーンコープのマカロニがおいしいのだなと思っただけです。

デュラムセモリナ100%!という小麦の品質が違うのでしょうね。私はマカロニ本来の味を楽しみたい、サラダにまぜたり、きのこのソテーと共に、これまたグリーンコープのバジルペースト(ジュノベーゼタイプ)にゆでたマカロニをあえておかずにするのが多いです。

サラダやちよつとしたソテーにボリュームが出ます。マカロニの味を一度味わってみてほしいと思います。

グリーンコープ生協ふくおか
水原 久美子

トロリとおいしい
め生乳たっぷりヨーグルト



子どもたちが学校から帰ってくると「おなかすいた!なんかない?」「グリーンコープのヨーグルトがあるよ」と言う、「いるいる」と言いつつ、スプーンを持ってテーブルにつきまます。ようすを見てみるとすぐ食べるわけではなく、納豆を食べる時のように丹念にかき混ぜています。子どもいわく、こいうするとトロリ感が出てすくおいしいとのこと。私はこのままでも十分しつとりしているのにと思いつつ、子どもたちの真似をしてみました。なるほど!ほとんど毎週注文しています。

グリーンコープ生協おおいた
浜口 暁音

投稿募集中

私の好きな
グリーンコープ商品

- 400字程度
- メ切 毎月末
- 住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールでお送りください。掲載分には図書カード(500円分)進呈。
- 住所・氏名などの組合員の個人情報、本紙に掲載の場合のみ使用します。

〒812-8561
福岡市博多区博多駅
中央街8-36博多ビル7F
グリーンコープコミュニケーション
ワーカーズ連(REN)
「共生の時代」編集部 宛
FAX 092-481-7876
Eメールアドレス
rikoho@greencoop.or.jp



▲左から室山秋見さん、片平明子さん、高橋恵さん、仁科智子さん、高山知佐子さん

春・秋の組合員集会やさまざまな組合員活動に託児は欠かせない。それを支えているのが子育てワーカーズや託児スタッフだ。

設立して7年になるグリーンコープ生協おかやまには「おかやま託児スタッフエルマ」(以下エルマ)という託児グループがある。

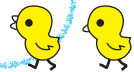
春の組合員集会で託児が行われている会場を訪ね、エルマの代表である仁科智子さん(グリーンコープ生協おかやま組合員)をはじめ、メンバーに話を聞いた。

いま地域を考える

No.200

子育ても生協活動も支えあってつながっていく

おかやま エルマ



エルマの前身である「おかやま託児スタッフ」が誕生したのは今から5年前。活発になる組合員活動に合わせて託児が求められるようになったからだ。「エルマ」と改称したのは2年前。現在メンバーは14人。結婚したばかりの若い人から、幼稚園の子どもを持つ子育て中の母親、子育てが一段落したベテランまで、幅広い年齢層で構成されている。仁科さんは昨年6月に二代目の代表を引き継いだ。仁科さん自身スタッフになる以前、グリーンコープの活動に、子連れで参加する母親にとって託児があるのは有難いと感じていた。そんな中、たまたま理事をしている同じ班の人の子どもを面倒をみたのがきっかけでスタッフになった。

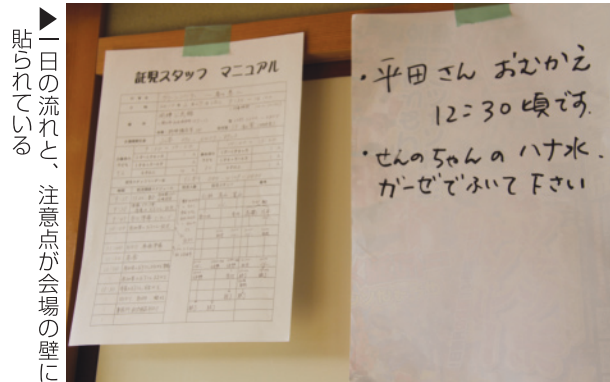
メンバーの一人である高橋さんは「福岡に住んでい

た頃、子どもを預かってもらって活動をしていました。今度は自分が人の役に立ちたいと思いスタッフになりました」。それぞれきつかけはさまざま。子どもを預かってもらって活動をしていました。山さんは自分の子のことを振り返る。「あの頃見えなかったものが客観的に見えてくるので、親の目線とはまた違った落ち着いた気持ちで子どもたちと接することができそうです」。緊張していた子どもたちも、だんだん慣れてくると笑い声が出てきて、お迎えの頃にはとびきりの笑顔になる。

最近結婚したばかりの室山さんは市のファミリーサポートセンターにも登録している。そこでは子どもと一対一。グリーンコープの託児はたくさんの子どもとかかわれるから面白そうだと思ひ、スタッフになった。「正直しんどいと感じることもありますが、子どものパワーに癒されて元気になります」と託児の魅力を実感する。

預かる子どもたちの年齢は1歳から小学校3年生まで。その日の人数、年齢、男女の割合で雰囲気や遊び方が違ってくる。「託児をしていると、母親の前とは違う子どもたちの一面が見えたり、個性を発見するのも楽しいですね」と仁科さんは託児の醍醐味を語る。

集会が終わる頃には、スタッフは託児カルテの記入も終わらせて、迎えに来た母親に子どものようすを伝える。帰って行く母親と子どもを見届けてから、片付け、掃除、反省会へと続き、



▲新聞を使って遊んでいるようす

一日の流れと、注意点が会場の壁に貼られている

エルマの活動は終了する。一日を振り返り「子どもにとっては新しい世界を知り、お母さんの大切さ、素晴らしさを再確認する場になっているのではないか」と仁科さんは言う。

よりよい託児をめざして「エルマ」の意味はイタリア語で「世話をする人。ベビーシッター」。自分たちの活動内容にぴったりの言葉と優しい響きが気に入って名付けた。

主な活動は、おかやまの事務所での委員会、理事会、各地域で開催されるつどいや集会での託児だ。外部からの依頼もあり、以前より活動の幅が広がってきている。

月一回第一木曜日に「エルマ会議」と称する定例会を開催、必要に応じて研修会なども行っている。エル

マ会議では、活動の反省や、スタッフへの連絡事項の共有化、担当理事から理事会や地域委員会の動きを報告してもらおう。スタッフ全員がグリーンコープの情報を把握し次の予定について話しあうというようにきちんと組織的な連携がとられている。エルマ会議を重ねるにつれて、他のスタッフとの協力の大切さを特に感じるようになり、互いに情報を共有するよう心がけるようになったそう。

エルマの活動からグリーンコープ運動へつながる

仁科さんは自分たちの活動について「今回びん牛乳が値下げになったことを地域委員が組合員へ報告し、利用普及を働きかける取り組みを行いました。その取り組みで支える役割を担い

ハイチ大地震救援カンパへのご協力

ありがとうございました

グリーンコープ各単協からのカンパ金総額 **14,700,664円**
 グリーンクラブからのカンパ金 **300,000円**

グリーンコープでは、ハイチ大地震発生後すぐに各単協で救援カンパに取り組みました。多くの組合員から寄せられたカンパ金は、各単協ごとに日本赤十字社に届けられます。

3月9日には、グリーンコープ生協ふくおか理事長田原幸子さんが日赤福岡県支部にふくおかでのカンパ金5,390,221円とグリーンクラブからの300,000円の目録を届けました。カンパ金は日赤を通じて現地のために有効に活用されます。

* グリーンクラブはグリーンコープの納入業者の会です。

2010年2月の組合員数 **407779人**

(1/24現在)

リユースリサイクルデータ 2010年1月分

牛乳びん 回収本数 633,465本 回収率 101.2% (12月20日～1月16日回収分)	リユースびん 回収本数 161,772本 回収率 72.5%
トレー 回収重量 11,908kg 回収率 77.2%	モウルドバック 回収重量 33,080kg 回収率 106.7%

フードマイレージ

2010年2月までに組合員の利用によってたまったのは

26,883,569.6

poco

CO₂に換算して2,688トンを削減したことになります

アジア民衆基金

2010年2月までに組合員の利用によってたまったのは

7,232,662円

た夢は小さな子どもからお年寄りまで気軽に利用でき、地域の人々が子育てに関わるような居場所作りだ。

「今はまだそこまでは到達していませんが、預ける母親や主催者側から『エルマさんに任せれば安心だ』と言ってもらえるようになって、もっと活動を地域に広げていきたい」と仁科さんたちは抱負を語る。

また。びん牛乳が値下がりしたことが自分たちの活動の延長線上にあつて、ひとつの輪になっている。グリーンコープの取り組みと私たちの存在ってつながっているんだというふうに感じました。普通の働き方ではこんなところまで見えてきませんね」とうれしそうに話す。

地域に根ざした活動を